

昭和三十二年度

眞宗同學會大會研究發表要旨

懷感傳についての一考察

村地哲明

懷感の諸傳記には、生・寂年等に關しては無記載であるが、『大周錄』（作九五〔結三・六六〕）によれば校經目僧の隨一人として記載する。またかかる記事と、『群疑論』序の懷感傳とに基いて考察する時は、西紀六九五より七〇一までの期間に敍し、出生は貞觀の初め頃と推定せられる。更に、『群疑論』の敍説によれば、懷感は千福寺淨土院の指導的地位にあつたであろうこと、三階教に對して幾度も論戰を闘わしたことが知られる。

懷感の諸傳記の記事を検討するに、『宋高僧傳』・『佛祖統紀』等における敍説は、『瑞應傳』の所傳に基いていることは一見して明瞭である。而してこのような『瑞應傳』の記載も、『群疑論』序に單に善導の弟子であつたと記述する立場の潤色とも眺められる點がある。しかも今の『群疑論』序の終文に、この序を平昌の孟銑造とする從來說について、幾分かの疑問を挿入しうるような文章を見出しえるのである。従つて、このようにも見られるると、『論』序における善導弟子説も、やや疑わしく思われるような點もある。なお、懷感を善導の弟子と見做

すについてすでに疑問を提供せるものに、法然の『選擇集』等における師資の釋の相違が甚しいとする見方と、望月説（支那淨土教史）の懷素とする立場とが擧げられる。

懷感の師承を探求するため『群疑論』の内容をあらゆる方面から研究するに、まず懷感の師を道綽としては、年代的にもまたその『群疑論』における地位から觀察しても無理がある。

次に、善導においては『群疑論』の「極樂時劫章」と「逆誘除取章」との兩章において、善導の學説を厳しく批評せられ、「是心作佛章」では善導の批判する學説を懷感が依用しているなど、全くその立場が相違する。又、佛土論の見方ににおいて、善導は唯報非化・報身報土・無漏土・無分段身・無苦士の説であるに對し、懷感は報化二土・有漏土・分段身・有苦士の存在を容認する立場であるから、この二師の教學體系は根本的に相違している如く思われる。しかもかかる相違は、『觀經』の定散の見方に、或は念佛の行因論の全般において、或は觀佛義において、更には實踐の方法において、根本的に相違することを指摘し得るようである。

しかるに、これを迦才『淨土論』に顯わされる淨土教思想と比較する場合には、前掲の善導と相違するあらゆる教學が一致するほか、それ以外の著書の體裁・觀經・觀・教判論・機根論等においても驚くほど一致している。しかもかように迦才の教學と一致するのみならず、猶且、『群疑論』においては迦才のことを、「二處拔量章」では二回も他に類例のない前德なる呼稱を以て指示しており、「二乘不生章」では淨影説をも含めて「舊諸德」説の敬語を依用し、更に「界攝不攝章」では迦才の

學說を「初釋爲^{ノラス}正」と記事して是認していること。又、「開遮不同章」では「逆誇除取章」の第十節たる迦才説を、重説して詳細に釋されていることなど、これらは迦才説を師説として殊更に尊重しているようと思われることが、指摘しうるようである。

懷感の著書としては、現存する『釋淨土群疑論』七卷と、

『群疑論』卷五に明示される『觀經疏』に、飛錫の『念佛三昧寶王論』に記事される『往生傳』とがある。この他に、『阿彌陀經疏』一卷・『觀無量壽經文義』一卷・『定散義疏』二卷の著作があつたことを、日本國の諸書に記載している。而してこれら諸書中、『定散義疏』は『群疏論』に顯わされる定散義の取扱いと相違する如く思われるから、懷感著とは見做され難いと思う。

『觀念法門』について

一 善導疏に於けるその地位

藤原幸章

『觀念法門』一卷は舊來四帖疏の後をうけてその念觀兩三昧論を詳しく述べたものと解せられてきた。然るに私は逆にこれを

四帖疏に先行する善導の最も初期の作品と考える。いまこれを①善導教學の成立過程から、②四帖疏との内容の矛盾から、③『安樂集』との緊密な對應關係から裏付けてゆこうとおもう。

第一に四帖疏に見られる善導の弘願中心の教學は單に『安樂集』の直接相承のみによつて成立したものではなく、寧ろ『安樂集』を通して知つた曇鸞の教學を積極的に受容したことに基く（拙稿「善導の古今轉定と發轉の教學」眞宗研究第一集參照）。然るに善導

が曇鸞を咀嚼してその四帖疏の教學を確立するまでは相當の時を要したに相違ない。しかもこの間のいわば準備時代の善導を支えていたものは道綽直傳の淨土教であつたことは、善導が道綽によつて先ず淨土教を開眼した事實によつて明瞭である。しかしてこのような道綽影響下における善導の『安樂集』領解の具體的表現こそ『觀念法門』であつたと思われる。

第二に本書の主要テーマの一たる念佛三昧論は明らかに定心定意の念佛であるが、それは四帖疏に力説せられた稱名念佛三昧論とは本質的に矛盾するところである。としたならば四帖疏を支える善導自身の廢立論を否定する如き内容をもつ本書が、四帖疏の後をうけて作られたものとはおもわれない。

第三に本書には四帖疏の如き明確な廢立の體系は未だ確立せられておらず、念觀は最後まで混亂している。このような混亂は本書が所謂要弘奄含の書『安樂集』の直接的相承の結果であることを證するものといえる。いま特に兩書の對應者しいものに注意すると、②兩書の念觀論の内容はもとより、その證文までが殆んど一致していること、⑤共に念觀未分でありつつ終には觀佛から念佛への方向を辿ること、⑥共に『觀經』を積極的に取上げることなく、而も實質的にはこの『經』の經旨を開顯しようとしたものであること、⑦兩書に引用せられた諸經文及びその引用の精神が共に一致していること、等々これである。

かくして本書は『安樂集』に最も近く、四帖疏にはかなりの距離があるというべく、従つてこの書は道綽門下か、又はそれに近い時代の善導の『安樂集』領解の書であり、道綽直傳の念觀兩三昧論を中心とした觀經概論である。それ故に本書は現存